

報告 2 : 広中一成 (愛知大学非常勤講師)

第二次長沙作戦の敗北原因の検討—インパール作戦と比較して

本報告では、太平洋戦争直後の 1941 年 12 月に日本軍が行った第二次長沙作戦について、日本軍を指揮した阿南惟幾軍司令官の経歴と作戦に至るまでの動向に着目して、日本軍が敗北した原因の一端を考察する。

第二次長沙作戦は、日中戦争勃発以来、数ある日中両軍の戦闘のなかで、日本軍が完敗した戦いとして知られている。阿南は、終戦時に陸相を務め、ポツダム宣言受諾直後、自死して身を処したことから、一部で「美化」され、その歩みが戦後映画化された。しかし、報告者は、冷静に阿南の作戦行動を見ると、決して美化できるものではないと考える。

これまでの研究で、第二次長沙作戦で日本軍が敗北した原因は、阿南が大本營の命令を無視して長沙市内に突入し、戦線が伸びきったところで、中国軍の猛反撃を受けたためであるとされている。なぜ、阿南はそのような誤った判断をしてしまったのか。

陸軍中央での勤務経験が長かった阿南は、戦場での実戦経験に乏しく、1938 年 11 月、山西省の第 109 師団長となって、初めて作戦部隊を指揮した。このとき、阿南は、これまで学んだ戦術を駆使して、中国軍と戦って完勝した。

この戦いは阿南にとっての「成功体験」となり、以後の戦いでも、阿南はこの「成功体験」をもとに戦った。しかし、阿南は「成功体験」にこだわりすぎたため、敵情判断を誤り、第二次長沙作戦の敗北につながった。

この「成功体験」へのこだわりは、1944 年のインパール作戦で日本軍に大きな損害を出した牟田口廉也軍司令官にも共通しており、日本軍敗北の遠因のひとつとなったといえる。

本報告では、以上の論点について、阿南が記した手記や、日本陸軍関連の一次史料、関係者の証言をもとに検討する。